

論文審査の結果の要旨

氏名：中 田 知 宏

専攻分野の名称：博士（芸術学）

論文題目：リヒャルト・ワーグナー 音響的創意にみるチューバの用法

－《指環》における物語るチューバへの変遷－

審査委員：（主査）教授 ・ 野 研 治

（副査）教授 緒 方 貴 子 東京藝術大学名誉教授 稲 川 榮 一

講師 平 野 昭

本論文は、「リヒャルト・ワーグナー 音響的創意にみるチューバの用法－《指環》における物語るチューバの変遷－」をテーマとして、リヒャルト・ワーグナーの《さまよえるオランダ人》、《タンホイザーとヴァルトブルクの歌合戦》、《ローエングリン》、《トリスタンとイゾルデ》、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》、《ニーベルングの指環》、《パルジファル》に用いられているチューバの用法の変遷に焦点をあて、ワーグナーの金管楽器の用法の一端を明らかにすることを目的としている。また演奏者としての視点を取り入れることで、ワーグナー作品の演奏におけるチューバの用法にも触れている。

論者はテーマにも含まれる「音響的創意」について、「ワーグナーが表現対象を音響によって聴き手に伝える試みや工夫である。本論では作曲技法をはじめとした音響の構成要素も音響的創意の一部として解釈する」と定義し、それに沿って論を進めている。また「音響的創意」をより明確に提示するための構成要素として、①音・音楽による表現の可能性を広げる作曲技法、②管弦楽、③管弦楽を構成している各楽器 の3つの構成要素を中心に検証している。さらにグスタフ・マーラー、アントン・ブルックナー、リヒャルト・シュトラウス、クロード・ドビュッシー、ジュゼッペ・ヴェルディ、アルノルト・シェーンベルクの作品について論じ、作曲家への影響やワーグナーの歴史的重要性について述べている。最終章では、新しい楽器の登場に深くかかわったヴァルヴシステムを解説し産業革命による技術革新についても考察している。

本論文は、序論、第1章、「音響的創意」における研究の現状、第2章、《指環》における金管楽器群の構造、第3章、「音響的創意」にみるチューバの用法、第4章、金管楽器の発達と産業革命による技術革新、結論、謝辞で構成されている。

第1章：「音響的創意」における研究の現状

第1章では、先行研究の現状を検討し、本論文の意義と独自性を論述している。岡田安樹浩、稲田隆之、伊藤綾らも指摘しているように、一定の評価を得ているリヒャルト・シュトラウス、ミヒャエル・ポルト、トビアス・ヤンツなどの先行研究において作曲技法や管弦楽法を主軸においた論考が見られ、一つの楽器の用法についての考察が限られるため、金管楽器の用法についての言及が少なく、さらにエゴン・フォスやユルゲン・メーダーらは、管弦楽における楽器の使用法について論述しているが、各楽器の用法について詳細な研究は見当たらないとして、チューバの用法について研究を行う本論文の意義と独自性を述べている。

第2章：《指環》における金管楽器群の構造

第1節：舞台作品における管弦楽編成の変遷と管弦楽の特徴では、アドルノの論説を要約したミヒャエル・ポルトの研究を基に、《ローエン格林》に用いられている管弦楽の3管編成と《指輪》に用いられた4管編成の関係を論考している。《タンホイザー》《ローエン格林》《トリスタンとイゾルデ》《マイスタージンガー》《指輪》から具体的に検討している。特に《トリスタンとイゾルデ》では、ホルツ・トランペット、《マイスタージンガー》《指環》では、シュテューア・ホルンなどの特殊管が用いられたことが述べられている。

第2節：管弦楽編成の4管編成への拡大と基盤の確立では、ワーグナーの音響的創意の核となる管弦楽の編成について検討している。ワーグナーの管弦楽の編成における最大の特徴として《指輪》での4管編成を挙げている。また《ローエン格林》での3管編成に1管加えることで新たな音色・響きを管弦楽にもたらしたと論じている。

第3節：金管楽器における同族楽器の拡大（付加1管に登場した楽器）では、《ローエン格林》が《指輪》の4管編成の基盤であり、《指輪》は4管編成において同一楽器のみによる純粋な響きに三和音を演奏することが可能になったことに加え、付加1管に加えられた楽器によって各楽器群の音域が低音域に拡大されていると述べている。ホルングループ、トランペット・グループ、トロンボーン・グループ、チューバ・グループから論じている。

第4節：金管楽器群の中のグループでは、金管楽器群における4管編成の大きな特徴として、金管楽器の中に4つのグループを創り出したことを挙げている。《タンホイザー》第3幕導入、《ジークフリート》第2幕第2場などの譜例を提示して解説している。

第5節：金管楽器群としての音響的構造では、4管編成における金管楽器・金管楽器群が創る音色・響きの構造の特徴を3つ挙げている。1つ目は3管編成と付加1管による4管編成、2つ目は金管楽器群の中に創られた4つの金管楽器グループ、3つ目は、金管楽器群という単位による音色、音響である。トランペット、テノール・トロンボーン、バス・トロンボーン、ヴァルヴ・ホルン、コントラバス・チューバ、バス・チューバなど各楽器の音域が解説されている。

第2章では、管弦楽から金管楽器群の用法について《タンホイザー》から《指輪》を対象として考察し、段階的な進化を認めている。《指輪》で新しく管弦楽に取り入れたワーグナー・チューバにより、新しい音色・響きを創り出した大きな要素であると考察している。また《指輪》における新しい金管楽器の登場は、トランペットからコントラバス・チューバまでの音色がより強固に結びつき、さらにワーグナー・チューバの音色が融合することによって、ワーグナー独自の金管楽器群の音響構造を創り上げていることが認められたと結論付けている。

第3章：「音響的創意」にみるチューバの用法

第1節：作曲技法による立体的音響空間の創造では、ワーグナーの音響的創意の要素である作曲技法は時間軸移動をも可能にした表現手段であると述べている。《指輪》における管弦楽がどのような技法を用いることにより、音楽的言語能力を持つに至っているかが検討されている。またチューバの用法を明らかにするために、「音画技法」「回想のモチーフ」「モチーフの立体的融合」「音色のロジック」「音色の配置法」を考察対象としている。

第2節：バス・チューバの用法の変遷では、ロマン的オペラにおいてチューバの用法を飛躍的に向上させた要因として、バス・チューバの登場を挙げ、オフィクレイドとバス・チューバそれぞれの音色の特性を詳細に紹介している。また《さまよえるオランダ人》では作曲当初はオフィクレイドが指定され譜面が特徴的であることから、楽器の音色や響きを想定されていたことを示唆している。

第3節：「音響的創意」に見るコントラバス・チューバの用法では、「物語る個々の楽器」としての「チューバの用法」について、第1項「音画技法」とコントラバス・チューバ、第2項「音画技法」とチューバ群、第3項チューバにおける「音色のロジック」、第4項モチーフの立体的融合、第5項音色の配置法により論じている。コントラバス・チューバの音色・響きは「音画技法」などの作曲技法と結びつき、巨人、大蛇、ドラゴンなどの意味を持つことになったと論じている。

第4節：「音響的創意の影響」では、楽劇とヴェルディ、チューバ群の音響とブルックナーにおいて、ヴェルディの《オテロ》《ファルスタッフ》、アントン・ブルックナーの《交響曲第7番》《交響曲第8番》《交響曲第9番》についてワーグナーの影響を解説している。マーラー、ドビュッシー、リヒャルト・シュトラウスへの影響では、グスタフ・マーラーの《交響曲第3番》、クロード・ドビュッシー《海 管弦楽のための3つの交響的素描》リヒャルト・シュトラウス《サロメ》を取り上げている。ワーグナーの影響とシェーンベルクでは《グレの歌》に見られる管弦楽編成の拡大について述べている。

第3章では、結論でも論じられている《ローエングリン》でのバス・チューバの用法は、重要なモチーフとの繋がりが強くなっていることを示し、《タンホイザー》までには見られない運動性の高い音型が任されたと述べている。さらに低音域の役割の比重も高く、管弦楽法の発達に伴いバス・チューバの用法にも深化を認めている。《指輪》におけるコントラバス・チューバやチューバ群の用法は作曲技法との連関を中心に論考し、「音画技法」をはじめとする作曲技法との結びつきによって、巨人、大蛇、ドラゴンなどの意味を持つことになったと指摘している。重要な点として、《ラインの黄金》から《ジークフリート》において、コントラバス・チューバの音色・響きが巨人ファフナーと結びついているとし、これによりコントラバス・チューバが「物語るチューバ」へと進化していると論じている。リヒャルト・シュトラウスは「物語る個々の楽器」についてヘンデルやハイドンを例に挙げていることを示し、ワーグナーがこの流れをより発展させたことを述べている。オーケストラの発展には、管弦楽が色彩豊かな響きを創る技術である「交響的な流れ」と管弦楽や個々の楽器の芸術的・感情的表現である「ドラマ的な流れ」があるとして、ワーグナーはこの2つの流れを統合し、管弦楽を「語りえないものを表現できるもの」にしたと考察している。

第4章：金管楽器群の発達と産業革命による技術革新

第1節：ヴァルヴシステムの登場と種類では、ヴァルヴシステムの歴史や仕組み、種類を詳述し、それらの登場が産業革命とどのように関わっていたかを論じている。金管楽器はヴァルヴシステムの登場により、半音階の演奏が可能になりすべて同じ響きで演奏が出来るようになったと述べている。

第2節：ヴァルヴ製造と産業革命では、直管、響鳴管の制作工程を紹介し、16世紀から19世紀にかけて制作された楽器と現代の製造との比較を行っている。

第3節：楽器製造における基盤の確立と産業革命の融合では、19世紀の後半、楽器製造の工場で訓練を受けた熟練した職人の背景にはマイスター制度の存在を述べている。マイスター制度については、ニュルンベルク市編纂会の会報に記録と共に当時の様子が記録されていることも述べている。

結論では、これまでの研究を要約し考察している。音楽的言語能力の向上は管楽器を構成する楽器群の発達をもたらし、楽器群の能力向上は楽器群を構成する個々の楽器の用法や能力の深化に繋がるものと論じている。全体（管弦楽）が持つ要素は個（各楽器）に集約され、個における深化は全体（管弦楽）に還元されるという、相互作用の働きによってもたらされていると結論付けている。この補完

関係の構築は、《指環》に至る実験的試みによる積み重ねが織り成した成果であり、ワーグナーの芸術を創り出す一端となっていると結んでいる。

全体を通してテーマである「リヒャルト・ワーグナー ―音響的創意にみるチューバの用法―」を段階的・論理的に解明している。またチューバという楽器を軸に研究を纏め、演奏者の視点も含まれている貴重な論文である。今後の継続的な研究を期待したい。

よって本論文は、博士（芸術学）の学位を授与されるに値すると認められる。

以 上

平成31年1月25日